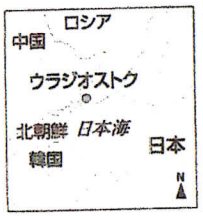
2017.6.17（土）
新潟日報朝刊
15面 オピニオン

北東アジアを読む

ウラジオストク　漂う郷愁 新しい資源に

小畑博正・新潟経営大観光経営学部教授



さる5月「北東アジア国際観光会議」参加のため、8年ぶり3度目のウラジオストク訪問の機会を頂いた。新潟市とは姉妹都市で古くから交流もあり、距離的にも近いロシア極東の港町を、日本（新潟）から見た観光の可能性について考えてみる。

今回、数多くの現地の観光関係者と意見交換を行ったが、ほとんどが昔からの既存の観光資源（ヨーロッパ風の街並み、雄大な自然、ロシアの歴史など）を今まで通り〝街の売り物〟としてPRしていた。しかし日本人の海外旅行ニーズや旅行動機は多様化、複雑化している。通り一遍の〝街の売り物〟では簡単には振り向いてはもらえない。

今回久しぶりに訪れたこの街の魅力を自分なりに再発見しようと散策したが、我々と同じ北東アジアの雰囲気と匂いを持っていると改めて感じた。この街にふさわしいキャッチフレーズは「○○的ノスタルジー」という言葉がフィットすると思った。

私なりに選んだ「○○的ノスタルジー」な観光資源をご紹介する。「ロシア極東の最果ての地（地理的）」、「2013年末惜しまれつつこの世を去った大滝詠一氏の名曲さらばシベリア鉄道（情緒的）」、「2004年公開の草彅剛主演映画ホテルビーナスの無国籍なロケ地（耽美的）」、「はるか9千キロの鉄路の起点（鉄道オタク的）」、「ソ連時代の潜水艦C－56博物館（社会主義的）」など、この街にしかないノスタルジーの玉手箱である。ただこれらの観光資源は、残念ながら今はやりの女子旅やご褒美旅には適さない。

シベリア鉄道の起点となるウラジオストク駅

ウラジオストクへの旅は、幾重の坂道の最果ての地を、不思議な幾何学模様のようなロシア語キリル文字が織りなす異国感で飾り、どこか懐かしい郷愁が漂う。もしロシアに日本の演歌なるものがあるのなら、まさに演歌の似合う街への旅といえる。

仮に私が日本向け観光PRの戦略立案の機会を得たとすれば、ご当地ソングが十八番の演歌歌手による「おんな港町ウラジオひとり旅」、こんな曲をプロデュースし、発信してみたいと本気で思った。

新潟の皆さま。こんな演歌の似合う街ウラジオストクへの旅、いかがだろうか。

（専門は旅行ビジネス、観光産業）